どうして生まれてきたの？

ちほ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
どうして生まれてきたの？

【Ｎコード】
Ｎ２７６８Ａ

【作者名】
ちほ

【あらすじ】
私の生きてきた現実の話です。みんなそれぞれ生き方がちがうと思いますが、今の生き方や環境など考えるきっかけになってもらえるとうれしいです。

私の家族

１９８３年私は生まれた。
父と母が出会って恋におち、交際半年で私が母のお腹の中に宿った。
父の親はとても反対したが、母はそれでも私を生んでくれた。
　　なぜ父の親は結婚を反対したかと言うと、父も母も今ではよくあるバツ１だからだった。
母は前の旦那との間に一人女の子を授かったが、旦那は働かず暴力が激しくて離婚した。
子供だけが救いだったのに、旦那の親が初孫を可愛がり、裁判になっても渡してはくれなかった・・・。
　母は家を出て町中をさまよっていた。
　そこであるスナックのママさんに声をかけられママの家に住ませてもらってそのスナックで働いていた。
　父もまた大恋愛をした彼女と結婚し一人の女の子を授かった。
しかしその奥さんは近所の旦那に恋をし、子供をつれてかけおちした・・・。
　これからどうすればいいのかと生きがいをなくしていた父が近所のスナックへ行って、そこで父と母は出会った。
　お互いの傷を埋めあうように父と母は恋をして私を授かったから私はとても大事にそだてられた。　私が成長するにつれ、お互いの残してきた子供のぶんまで可愛がってくれた。　そして二年後、母のお腹に新しい命ができた。私の妹だった。　妹はとても可愛かった。　どこに行くにも妹と一緒で母は妹と私を平等に可愛がった。でも妹と行動するにつれて私と妹と愛され方が違うことに気がついた・・・。
　　私の父の親は妹が生まれる頃には二人の結婚を心から祝福していた。
　父の親は妹をとても可愛がり、クリスマスと誕生日には必ずケ

ーキを買ってきた。
だが、私の誕生日にはケーキがなかった・・・。
　母がいつもケーキを買ってごちそうをしてくれるのだが、妹の時はケーキが二つ。
よく考えたら父の親にだっこされたり、お菓子を買ってもらった記憶はなかった・・・。
　私と妹は大きくなるにつれ喧嘩が増えた。　喧嘩をすると必ず私が怒られるのだ、理由は『お姉ちゃんだから』ただそれだけだった・・・。　父はその『お姉ちゃんだから』と言う理由でだんだん私と妹の差をつけた。　妹と喧嘩をすると家を追い出されて冬でも何時間も家に入れてくれなかったり、おしいれに閉じ込めたり・・・　　私が小学3年生になると父は今の会社を辞めて自分で会社を立ち上げた。
父は左官と言う現場での仕事だった。
父は接待と言ってはよく飲みにでた。
そして仕事のストレスを母と私で発散した。
たとえば、２０時までにご飯とお風呂の用意ができていないと怒った。父は私と母に食器をなげたり期限が悪い日には炊飯器や掃除機など投げてきたり、殴る、蹴るは当たり前だった。私と母はただ耐えるしかなかった。　そして父の暴力がなくなると父は浮気をしていた。　イタズラ電話はひどくなり、もっとひどい時は女がやってきて、母に
「あんたたちがいるからお宅の旦那と一緒になれないのよ、早く死んでよ」
とか
「いつになったら離婚してくれるの？」
とか・・・。　母は毎日泣いていた。私は母に
「離婚して楽になろうよ」
と言った。　まだ幼い私は離婚することがどんなに大変か、母子家庭がどんなに大変かしらなかった。　母はやり場のない怒

りから、私に八つ当りするようになった・・・。　私は父からも母からも殴られるようになった。　気づいたら私は笑うことすらわからなくなり、ただ、父と母の気がすむなら殴られても耐えるものだと考えていた。　それから学校に行っても表情一つかえない私はみんなからいじめられるようになった。どこにいても居場所はなかった・・・。　そして私は小学６年生になった。　父の会社の経営が厳しくなり、学費さえ払えなくなり、借金の取り立てが耐えなかった。　家の電話は一日中鳴りっぱなし。家族四人が食べていくお金さえなくなった・・・。　電気が停まってろうそくで暮らしたり、水が停まって、食器を洗うのも近所のセルフの洗車場へ行った。お水は近所の公園でくんですごした。　毎日みんなお腹が鳴っているけど、我慢していた。食卓に並ぶ料理は袋ラーメン二つを四人でわけた。でもそんな生活もだんだんできなくなり、一つのラーメンを妹と私で半分ずつ食べ、残ったラーメンのスープにご飯を入れて父と母が食べた。でも私は楽しかった。　なぜなら、家族の会話がなくなっていたのに、みんなが協力しあってご飯をわけ、近くの公園や洗車場に行ってもいろんな話ができた私は父と母を怒らせないように顔色をうかがう性格になっていた・・・。　そんな生活でも、家族でいることが幸せだった。　妹と私が寝ると父と母はいつも喧嘩をしていた。　私は父が母を毎日殴っていることを知っていたので、喧嘩がおさまるまで寝たふりをしていた・・・。　ある日父はまた母を殴っていた。母は限界だったのか家を飛び出した、私は母の後をついていきたかったが、殴られるのが恐くて寝たふりをしていた。　その時、突然いやな気配がした。　父が私のふとんの中に入ってきた！　起き上がりたいが、父が恐くてじっとしていた。　すると父の手が私のパジャマの中に入ってきた。私はビックリして息を飲んだ・・・。　父は私の胸を揉んできた。　私はどうしていいかわからなくてじっと耐えるしかなかった。　それから父は毎晩みんなが寝ると私のふとんに入ってきた。　だんだん父はエスカレー

トしてきたのだった。　私はそんな父が今まで以上に恐かった。
今日も父がやってくる。そう思うと眠れなかった・・・。
母も父の行動には気づいてる様子だったが、母も殴られるのが恐くて見てないふりをしていたのだろう。
私は誰かに相談したかったが恐くて言えなかった。
そして今日もみんなが寝静まると父はやってきた。
助けて！　私は心の中で神様に助けを求めたが神様なんているわけもなく、父は私のパジャマの中に手を入れてきた・・・。
気持ち悪くて震えが止まらなかった。
父の息はだんだん荒くなり、お酒の匂いで気持ち悪くなった。
そしてついに私のパンツの中に父の手が入ってきた、私は逃げたしたかったが殴られるのが恐くてだまっていた。
父の手が私のパンツの中で動いていた、その時、突然激痛が走った！父の指が、私の膣の中に入ってきたのだった、私は歯をくいしばって耐えるしかなかった。　目からは涙が止まらなかった・・・。
次の日、父は何もなかったような顔で仕事に出掛けた。　私はあまりの痛さと恐怖から、学校を休んだ・・・。
「死にたい。」
そう思った・・・。台所に包丁がある。それで自分を刺せば楽になる、そう思って台所に向かった。　その時、母の部屋から　ガシャンとすごい音がした。私はあわてて母の部屋へ行くと、母は右手にビンビール、左手には大量の薬を持っていた。　私はあわてて母のもとへ行き、母の手から薬をとった。
「これは何？」
私が聞くと母は笑って
「睡眠薬よ！これを飲まなきゃ眠れないの」
そう言った母の目から涙があふれてきた。
私はずっと母の横に座っていた。
気づくと母は眠っていた・・・。
夕方になると母は飛び起き、晩ご飯のしたくをはじめ

た。
私もお手伝いをしていたが、今日の母を見てなぜか母をほぉっておけない気がした。
私はその日から学校へ行かなくなった。
毎晩父がふとんに入ってきてもただ耐えて、昼は母と一緒にたわいもない話をしていた。
母は時々ビール片手に睡眠薬を飲んだ。　私は毎日泣く母の話をだまって聞いていた。　そして時がたち、私は中学生になった。　そのころには母は睡眠薬を飲まなくなっていたし、私も友達がほしくて学校へ通うことにした。　この頃には父は女のもとへ行く機会がおおくなり、あまり家には帰らなくなっていた。私と妹は母が悲しむ顔をみたくないので家事を手伝い、母はパートへ出るようになった。
母はパートへ出てから少しずつ明るくなった。
夜は三人で笑いながら食事をし、三人並んで眠っていた。そんな毎日が幸せだった・・・。　また一年たち、父も家にいるようになったが、私に何もしてこなくなった。私は父と会話をしなくなっていた。　母とはいろんな会話をするようになっていたが、父のことは伝える勇気がなかった。　ある日私が母に
「どうしてお母さんはお父さんと一緒にいるの？苦労するばっかりぢゃん」
すると母は
「お母さんの好きな人だからよ」
そう言って笑った。　そして父と母の出会ったころの話や、父と母には子供がいることを知った。　私は彼氏や恋人ができたことがなかったので母の気持ちなんかわかるわけなかった。私は男の人がすべて父とかぶってしまい、恋愛すらできなかった。　そして何ヵ月たち、季節は冬になった。
いつものように学校へ行くしたくをしていると、隣で母はせきばかりしていた。私は体温計を持ってきて母に熱をはかると、３９

度近い熱が出ていた。母に聞くと、母はお腹も壊し、トイレに行ってら戻していた。　私と妹が心配して母に何か食べさせて、薬を飲ませてあげようとしていると、話を聞いていた父が
「食べてももどすような奴に何も食わすな、寝ておけば治る」
と言い母がお水を飲もうとしても父は怒った。
「おまえらは学校へ行け！」
そう言って父は怒鳴った。　私も妹も父には言い返せず学校へ行った。　学校が終わると飛んで帰った。　母はまだつらそうにしていた。　まだ父が帰ってなかったので母にお粥を作って食べさせた。　その時、父が突然帰ってきた。父は私と母に怒鳴った。
「吐くやつに食わす必要はない！」
父はお粥をごみ箱に捨てた。
私は思わず涙があふれてきた。
母は黙ってふとんに入り、眠ったのだった。　次の日も母は何も食べず。何も食べないまま戻しているのでげっそりしていた・・・。　翌朝、母は元気になっていた。私と妹は母が朝ご飯を食べたのを確認して学校へ向かった。　そして午後、私がのんびり授業を受けていると突然担任の先生が来て私を呼び出した。　先生は
「落ち着いて聞いてね！」
と言うが私は落ち着いていて、先生が普通ぢゃなかった。私はだまってうなずくと
「今病院から連絡があって、あなたのお母さんが道端で倒れていて、たまたま通りすがった人が救急車を呼んでくれたそうよ」
私は突然のことで頭の中が真っ白になった。
「どこの病院？」
先生が答えると私はそのまま家に帰った。　私はめったにもらえないお小遣いを少しずつためていた貯金箱を壊した。そしてタクシーを呼んで病院へ向かった。

私はすぐに母に会いたかったが、診察中でしばらくまたされたが、

３０分くらいで母が出てきた。母は笑顔で『心配かけてごめんね！もう元気よっ』と言った。　私は母の笑顔を見て安心した。しばらくして父が病院にやってきた。
父は医者と少し話をしてしばらくして戻ってきたので三人で家に帰った。
母は安心して眠りについた・・・。
　私はなぜ母が倒れたのか変な胸騒ぎがしたので、父と話をした『お母さん本当に何もなかったの？』すると父は『血管がつまって倒れただけだし大丈夫！医者も安静にすればいいって言ったし。
だいたい入院する金なんてうちにはないからな』そう言うと父は仕事に戻った。
　私は心配になって母のところに行った。
　母はぐっすり眠っていたが、母の腕と顔には倒れたときの傷があった・・・。
　普通にこけても顔に傷なんてつかないし、だいたい血管がつまって倒れるなんて普通じゃないよ・・・　私は次の日学校を休んだ。
　母が心配だったからだ。
　母は突然『脳が悪いのかなぁ？病院で見てもらおうかな』そう言ってしたくをはじめた。
　私もしたくをして一緒に出掛けた。
母と二人で外出なんて久しぶりだった。
　私はなぜかうれしかった。
商店街を歩いているとゲームセンターがあった。
　『お母さん！久しぶりにプリクラ撮らない？』すると母は『昨日顔ケガしたし、ケガ治ってからにしよっ！』そう言ったのでしょうがなく我慢した。
　しばらく歩くと病院についた。
診察をしてもらったが、脳のレントゲンをとるしかないと言われた。

母は『また来ます。
』一言で病院を出た。
私は『何でレントゲンとらないの？お母さんに何かあったら困るじゃん！』と聞いたら母が『うちはお金ないから保険も入ってないの、レントゲンを実費で撮ってもらったら高いのよ・・・。それに孫の顔見るまで死ねないしね』そう言って母は笑った。
私は笑顔の母の顔を見れなかった・・・。
帰りに近くの喫茶店に寄った。
母はコーヒー、私はオレンジジュースを飲みながらいろんな話をした。
学校でのできごと、家のこと、そして二人仲良く家に帰った。
学校休んで母とのんびりできたので私はうれしかった。
家に帰ると母が『ちほにお願いがあるんだけど・・・』
私はなぜか聞きたくないような気がした、でも母が真剣な顔をしていたので『何？』聞いてみた。
『お母さんにもし何かあったら、この棚のうえにお金おいておくからよろしくね』そう言って母は棚の上にお金をかくした。
私は何か嫌な予感がした。
でも母は元気だし心配しすぎなのかなと思い、この日は母の代わりに夕食を作った。
しばらくすると妹が帰ってきた。
妹も母のことを心配してたので母のそばから離れなかった、しばらくして夕食ができた。
父はまだ帰ってなかったので三人仲良くご飯を食べた。
しばらくして父も帰ってきてみんなそれぞれお風呂に入ったりテレビを見たり、いつもの生活だった・・・。
時計を見ると２１時になっていた。
父と妹はめずらしくもう眠っていた。
この日は母と私がかならず見ているドラマがあり二人で見ていた。

そしてドラマが終わりかけのとき、母が『なんか息苦しい、お水くれない？』と言った。
母は喘息ももっていたので、この季節になるとこういうのはふつうだった、私は台所に言ってお水をくんだ。
母に渡してまた私はドラマを見ていた。
母は調子が悪いのか、窓をあけ水の入ったコップ片手にじっとしていた。
私はいつものことなので気にもとめずドラマを見ていた。
しばらくするとドラマが終わって『今日のドラマ良かったのにお母さんあんまり見れなかったね？』そう言いながら母にちかずいた、そして母の顔を見ると・・・　母は舌を噛み口から泡を噴いていた。
『お・か・あ・さ・ん・？』こんな母を見たのは初めてで、あわてて父を起こしに行った。父は台所からスプーンをもってきて母の口をひっしでこじ開けようとした。　母の目を見ると白目をむいて低い声でうなっていた、私は急いで救急車を呼んだ。どうしていいかわからないのと母のただならぬ状況で頭はパニックだった、母のうなり声がだんだんひどくなってきた。私は恐くなって妹を起こした！

母の死

3～40分くらいまった時、救急車がやっときた。
母は白目をむいてもがいていた。
父と救急隊員はもがく母を無理矢理押さえてタンカにのせた、家の外にでると近所の人がやじうまになって見にきていた、（人の不幸がそんなに楽しいの？）私は腹が立った。
母がやっと救急車に乗った時、父が『妹はまだ小さいから無理だけど、おまえも一緒に行くか？』と言った。
妹はまだ小学6年生。
泣き崩れている妹を見るとつれていけなかった・・・。
『お母さんは大丈夫だからお家で留守番しててね？』私は妹に言うと『嫌だ！』と言ってまた泣き崩れた。
早く病院に行かないと母が危ないので、妹をおいて、私たちは病院へ行った。
運ばれてきた病院は先日母が倒れた時に来た病院だった。
母は息をしていなかった。
看護婦が『ここから先は入れないので、待っていてください』そう言われて父と私は待合室に通された・・・。
私だってまだ中学2年生だから、こんな状況に耐えれるはずがなかった。
私は妹が気になり、近所の友達に電話をかけた『今お母さんが大変で・・・』自分で口にして初めて今の状況を理解したのか、誰かと話て安心したのか私は涙が止まらなかった。
『妹が家で一人なの・・・』そう言うと友達は理解して『さっきの救急車ちほの家だったの？！大丈夫！妹は私があずかるから！』私は『ありがとう』一言言って電話を切った。
待合室に戻ると父は一人うつむいていた。私も隣に座ってうつむいた・・・。
それから一時間ほどたって、医者がやってきた。『こちらへ来て

ください・・・』　母の入った部屋だった。私はニコニコして母の元へむかった。そして部屋に入ると・・・

母の顔に白い布がかかっていた。父は声をだして泣きだした、私はわからなかった・・・。その時医者が『ご愁傷さまです』私は母が亡くなったことを知った。母の顔の布を取ると母は寝てるみたいだった。　おおきなワゴン車に乗り、私たちは家に帰った。　しばらくすると友達家族が妹をつれ帰ってきた。

妹が『お母さんは？』とてもニコニコして走ってきた。私はなんて言っていいのかわからず『車の中で寝てるよ』と言ってしまった・・・。　私は妹にわからないように移動してしゃがみこんで泣き崩れた。　すると友達と友達のお母さんがだまって抱き締めてくれた。私はまた涙があふれた。

しばらくすると妹が戻ってきて『お母さん起きてくれないよ？』と不思議そうに言った。私が黙っていると父がやってきて『お母さん、助からなかった・・・ごめんな』そう言って父も泣き崩れた。　妹も声をだして泣きだした。

友達が『なにかできることがあったら言ってね』そう言って帰って行った。　その場にいずらかったのだろう、友達家族もみんな泣いていた。今になっても忘れられない、とても寒い2月7日だった・・・。　気付ば朝になっていた。父は親戚などに電話をかけ、母が亡くなったことを言っていた。　不思議と私は辛くなかった。母を見ると本当に寝てるようで、死人には見えなかった、それに昨日まであんなに元気だったので、また起き上がるんじゃないかと思っていた。

葬式

朝がやってきた。　母は目覚める気配がなかった。　「少し疲れているのかな？」
そう思った。
　しばらくすると、母のお姉ちゃん、母の両親、父のみうちがやってきた。
　みんな泣いていたが、私は涙がでなかった。
今にも起き上がりそうな母を見てると亡くなったと言う実感がわかないのだ。
　静かに母の隣にいたいのに、葬式の話や、形見に何か持って帰ろうとする人や、ただわいわい酒を飲む人、正直うっとおしかった。
　翌日、母の葬式が始まった。
私と妹はまだ小学生と中学生なので、あまり仲良くない生徒や、話したことのない先生たちも来た。
みんな世間体だけであつまっているだけ、お坊さんだって、お金になるからただおきょうを読むだけ。
だるい。　そしてついに母を火葬場につれていくとき、父のおじいちゃんが、あいさつをした。みんなまた泣きだした。　私はだまって火葬場に行く。　今まで、お葬式に行っても何とも思わなかったが、火葬場はなんともいえないくらいひやっとして、嗅いだ事のない匂いがする。　私は辛そうにしている妹の所へ行き、母が骨になるのを静かに待った。
　しばらく待って、母が焼けたので、母の骨のところに行った。　もう母の姿はなく、ただの骨になっていた。　私はもっと母を見ておけばと後悔した。もう母に会えない、そしてもう母は生き返るわけがなかった・・・。　本当のお別れだった。私は泣き崩れて気づいたら家に帰っていた。　親戚中は父と何か話していた。　しばらくすると親戚もみんな帰り、父が私と妹を呼

んだ。　「これから三人になって、お母さんの居ない生活が始まる。ちゃんと協力しあっていこうな。」
父は泣いた。　私と妹は
「母じゃなく、父が死ねば良かったのに」
心の中でそう思った。　母が倒れるすこし前に風邪で寝込んだ時なにも与えず、水分すらとってないから、母が倒れてもおかしくない、母を殺したのは父だ。そう思った。　母が死んだ日死因は不明のため、
「解剖しますか？」
と聞かれた時、母が生き返るかなと思って、また血液がながれてくれるかと思って、断った時、父が席を離れたので、
「水分とらなくて、食物も与えず熱をだしたまま二日くらいいたら血管つまって死んだりしますか？」
と私が聞くと、
「あなたのお母さんは少し太っていたからありえないとは言えません」
と言われたのを思いだした。　あの時父に怒られながらも母に何かを与える勇気さえあれば母は助かっていた。　でも警察に言ったって子供の言うことを真に受けるわけがなかった。
世間とはそういうもの。　母は生きていてほんとうに幸せだったのだろうか・・・

変わった私

葬儀が終わり、４９日が来た日、母の身内は誰一人こなかった。
あとからわかった話だが、父が香典も返さず、さらにお金をせびり、母の身内から縁を切られたそうだった。
私はまだ１４歳でどうしていいかわからず、母の身内もそんなことだけで、母のことを見捨てるので、腹が立った。
そしてまたしばらくすると、父はあまり働かなくなった。
毎日飲み歩き、母が私と妹に残したお金で借金返済をし、残りのお金で毎日遊んでいた。
私は誰も信用できなくなった・・・。
家に居ても楽しくないので、学校にはとりあえず通った。
みんな変な同情やかげぐちばかり、見てるとイライラする。
家に帰るとご飯の支度、掃除、買い物、すべてしないといけない。
言えば妹が手伝ってくれるが、友達と遊ぶばかりで、いつも私だけ家政婦のようだった。
ある日、妹と二人で食事をして。食器洗いを頼んだとき妹が
「今日テストで疲れたからやって！」
と言って来た。
今思えばしょうがないことだが、私は学校と家の家事ばかりで、部活も止め、遊びにも行ってないし、妹の発言に腹が立った。
その瞬間妹を殴り、家事はほっておいた。
なんか心の中がスッキリした。
また次の日も何かあれば妹を殴り、癖になっていた。
妹は体中アザだらけで毎日泣いていたが、泣く姿もまた腹が立った。
ある日の日曜日、家には私一人で、いつものように掃除をしていた。

そして妹の部屋に入り掃除機をかけていると机に一枚の手紙があった。
私はその宛先を見て驚いた。
宛先は母へだったのだ！　私は見ちゃいけないと思いながらも気になり、中を見た。
『おかあさんへ　お元気ですか？天国はどんな所ですか？やっぱりきれいなところ？おかあさんがいなくなって、お父さんはあまり帰らないし、おねえちゃんは、ストレスがたまって、毎日おねえちゃんになぐられるよ、もうこれ以上たえれないよ、おかあさんじゃなくあたしが死んだら良かったのに　あたしがいなければおねえちゃんも楽になれるのにね！』　手紙には、涙の落ちたあとが沢山あった。
私はその場で泣き崩れた。
妹にとんでもないことをしたのに今まで気づかなかった。
最低な姉だった・・・。
夕方になり、私は一人晩ご飯を作りながら、今までしてきたことを思い出した。
そういえば、妹は反抗したら殴られるので、自分の右腕をリストカットしていた。　私はリストカットする人はただのバカだと思い、妹がリストカットするたび殴っていたのだ。　妹をそんなに追い詰めていたことにも気づかず、なんて言えばいいかわからなかった。
ご飯が出来上がるとびくびくしながら妹が帰ってきた。　私は
「ごめんなさい」
が言えなかった。　二人は無言で食事をした。　この日私は眠れなかった。　次の日いつもどおり学校へ行った。
私は頭が痛いとうそついて早退した。　家に帰って私は母のぶつだんの前に座った。
「お母さんごめんなさい」
私は夕方までぶつだんの前に座っていた。

しばらくすると妹が帰ってきた。　私は妹を呼んだ。妹はびくびくしながら私の前に座る。　私は妹の右腕を見た。　昨日はリストカットしていないようだった。　私はゆっくり話をした

「今まで殴ってごめんね。辛かったでしょ？私にできることがあれば何でもするし、もう手をあげないって約束するから」

　そう言うと妹わうつむいて涙を流しながら

「あたしがお姉ちゃんの思うとおりにならないのが悪いんだよ、あたしこそごめんなさい・・・」

そう言って泣き崩れた。　私はそっと妹の右腕をとり、リストカットした腕をなでた。　この傷は一生治らない。見るだけで痛々しい腕だった。　そして私にとっても一生の傷となった。

それからは、妹にはやさしくせっするようになった。　妹もやさしく接してくれるようになり。家事も分担して、毎日一日の出来事の話や、妹がいじめにあってもまもってあげるようになった。

気が付くともう春になっていた。　妹は中学一年生になっていた。

　そして私も中学3年生になった。

同じ中学なので、毎日がウキウキだった。　でもかわらず私は人が信用できない・・・。

私の今の担任の先生は大嫌いだった。いつも私に同情してくる。母がいなくても私はしっかりやっているつもりなのに、いつも心配したフリをするのだ。　私はだんだん学校へ行かなくなり、毎日友達と遊んだ。　父が、妹にしかお小遣いを上げないため、服、ご飯など私はいつも万引きをしていた。

お小遣いがほしくなれば、クラスでおとなしいやつからお金を取ったりしていた。

こんな自由な生活初めてで、家のことは気にしなくていいし、門限も無視して朝まで遊べるし、毎日開放されていた。　この時同じように遊び歩く友達がたくさん居て、特に仲のいい友達は、由美、幸

恵、優子だった。由美はいつも喧嘩や万引きばかりしていたが、夜は彼氏といるためおとなしかった。優子は腹黒いやつだが、根はやさしい子だった。幸恵は仲良しだが、どちらかと言えば、暇つぶしに遊ぶくらいだった。

ある日、妹が泣きながら帰って来た。理由を聞いてみると姉の私がヤンキーだからって調子にのるなといじめにあってるらしい。　私は次の日学校へ行ったが、その子は来ていなかった。イライラしながら、幸恵と学校の外でブラブラしていると、その子が通りかかった。私はすぐに追いかけ、その子を怒鳴り、久々に殴った。手は出さないように気をつけていたが、つい手が出てしまったのだ。

気づくとその子は固まっていて、幸恵が止めてくれた。その子の友達が、先生を呼んできたが、私はぼうっとしていた。さっきまで殴っていたその子は過呼吸をおこして口から泡を吹いていた。そしてそのまま病院へ運ばれた。

　次の日、担任の先生に呼び出された。昨日の子の親が怒鳴りこんで来たと言う。

私は校長室に呼ばれ、昨日の子の父親と会った。父親の話では、「あと5分遅れたら命はなかった。先生の話によると一度過呼吸になると、癖になり、二度と直らないといわれたんだ。　おまえに娘の責任を取れるのか？」と言われた。　私には心配してくれる家族も居ないし、人の娘にとんでもないことをした。私は「すいませんでした。」そうしか言えなかった・・・。

話が終わり、私は家に帰った。

私はもう少しで犯罪者になるとこだった。このままでは私は腐った人間で終わってしまう・・・。

私は昔母に言われた言葉を思い出した。「人に良い事をすると、良い事が返ってくるのよ！そして悪い事をすると、必ず自分に不幸が起こるのよ」　私はどう変わればいいかわからないが、人を憎んで生きていても自分がむなしいだけだと気づいた。

　次の日、私はとりあえず学校へ行って勉強を始めた。授業を聞い

ても言ってることが良くわからなかった。　そして夕方、父に久しぶりに話しをした「勉強して、高校へ行きたい」　すると父は「いまさら勉強してもバカはバカだろ？高校は金がかかるから、途中で辞められたら困る。」そう言って父は家を出た。
それから毎日勉強をした。

別に行きたい高校があったわけじゃないが、自分が何をしたいか、自分は人の役にたてるかしりたかった。　担任の先生に相談をしてみた。すると先生は鼻で笑って答えた
「今のままじゃいける高校はないわ、今から勉強してなんとかいける高校は○○高だけね！」
そう言って先生は職員室に戻った・・・。　先生の言った○○高とは、誰でも行けると言ううわさのバカ高校だった。私は必死に勉強をした。　由美、幸恵、優子は
「今更意味ないじゃん！」
と笑った。

友達

いよいよ受験の季節がやってきた。私は徹夜して勉強した。　どきどきしながら高校へ向かった。先生たちに案内され、私は緊張しながら席についた。　どんな人が受験するのかな？と思いあたりを見回すと、勉強したことのなさそうな人や、ただ受験するだけのヤンキーたち、登校拒否で引きこもっていたような人ばかり・・・。私も以前はこの人たちと一緒だったので、まるで昔の自分を見てるようだった。　キーンコーンカーンコーン！！　チャイムが鳴り、全員席についた。先生が簡単な説明をして「はいっ！」と同時に受験が始まった。

私はテストの内容を見てビックリした。　国語は小学生で習った漢字、数学は足し算引き算、英語はアルファベットの読み方書き方、英会話が流れてきて、「今からの会話を日本語になおしなさい」と流れてきた英会話は、全部流れたあと日本語の答えも流れる・・・。

「徹夜した意味ないじゃん！」私はそう思ってスラスラ答えていく。　こんなに簡単だったらみんな受かるのかな？と少し不安になった。　そして簡単な面接をし、家に帰った。

プルルプルル！！！！　私の携帯がなった、相手は幸恵だった。

「受験どうだった？」

「めちゃヨユー♪」

「これから遊ばない？」

「ＯＫ」

受験の謹白した空気からぬけ緊張がとけたので、久々に遊びまくった。

久々に見た幸恵はとても痩せていた。　しばらくすると、「お金かしてくれない？　先輩に借りてて早く返さないとしばかれるんだあ・・・。」　私は理由は聞かなかったが、持っていた１万円を貸した。それから幸恵は毎日言ってきた。私は気になってお金の使い道を聞

いた。　「ちほだから言うけど、私痩せたでしょ？」
幸恵はうれしそうに言った。　「痩せたけど、ちょっと老けたんじゃない？」そういって笑うとしばらく黙り、幸恵がそっと口を開いた・・・。
「実は今、シャブやってるんだ。すごいよ今日で１０日もご飯食べてないのにお腹空かないし、最近めちゃナンパされるし～」そういって幸恵は笑った。　私はムカついて幸恵を殴った。
「そんなんして何が楽しい？あんたただのバカじゃん！」
私は家に帰った・・・。　家に帰ると幸恵から携帯が鳴った。私はほっておいた。
私は小さい頃母と約束していたことがあった。それは私が小学生の時、宿題で将来の夢を作文に書くということがあった。私は将来の夢は父が居なくなる事。そう思っていたが、母には言えず適当に書けばいいと思って母に聞いた。「お母さんの将来の夢は？」今考えると母は大人なのに変な質問だが母はニッコリ答えてくれた「お母さんの将来の夢はちほたちが生む赤ちゃんを見ることよ」母は本当に子供が好きだった。だから私は元気な子供を産みたいといつも思っていた。　幸恵たちのようにシンナーやシャブをしたら、元気な子供を産むどころか、子供が産めない体になる・・・。だから幸恵のしていることはとても嫌だった。
　それから何日かすると、幸恵が突然家に来た。　幸恵はとてもげっそりしていて、生きてる顔をしていなっかた。　とりあえず家に入れると「お金がなくて、援交してたんだけど、親父にも逃げられて・・・。明日までに先輩にシャブ代もっていかないと殺される・・・。」幸恵は泣き出した。私はそっと幸恵の腕を見た。もう骨と皮になっていて、注射器のあとが沢山あって言葉にならなかった・・。しばらくして「明日先輩に殴られてきたら？」私が言った。「殴られて縁をきられてらシャブが入らなくなって、ちょうどやめれるじゃん！」　この言葉以外かける言葉がなかった。幸恵の言ってる先輩は昔からすることが半端なく、しょうじき幸恵がどうなるかわか

らなかったが、幸恵と一緒にお金を用意したところで、また同じことの繰り返しだと思った。　幸恵は「わかった・・・。またくるね」そういって帰っていった・・・。
次の日の夜、幸恵から電話がなった。「はい」私がでると幸恵は無言だった。私はしばらく聞いてると、幸恵の泣く声が聞こえた。「今どこ？」　「ちほの・・・家の近く・・・。」　私はあわてて家を出ると傷まみれの幸恵がいた。　「大丈夫？」あわてて幸恵に肩をかすが、幸恵はボコボコにされていて、なかなか歩けなかった。ゆっくり家に入れて幸恵を見ると幸恵の顔の形がかわっていた。幸恵がゆっくり話しだした「約束した場所に行ったら優子が居て、金は？って聞かれたけど、持ってないって行ったらその場で優子にボコボコにされた。そのあと先輩がやかんを持ってきて、ふとももからかけられた・・・。優子が裏切ると思わなかった・・・。もう県外に逃げるしかないね、優子がまた会ったら警察にシャブのこと言うって・・・。」
幸恵はとても辛そうだった。私は黙って幸恵のケガの消毒をした。なにもしてあげられない自分にもはらがたったが、幸恵が早く自分のやったことの重大さに気づけて良かった・・・。

いよいよ明日は合格発表だった！私は早くねることにした・・・。
　朝少し早く起きて、ばっちり支度をし、家を出た。ドキドキしながら待っていると、一枚の大きな紙が貼られた。私の番号があったのだ。「やった～」思わず叫んだ。春から私も高校生だっ。とりあえず父に報告をした。「おめでとう・・。」あまりうれしそうではなかった。私の受けた学校は私立なので、お金がかかるからだろう・・・。　私はそのまま幸恵の家に行った。　幸恵の家はお金持ちで家政婦がいる。私はあいさつをして家に入ると幸恵も一緒に喜んでくれた。「おめでとう！春から頑張ってよ！」素直にうれしかった。
　幸恵の今後のことについての話になった。幸恵の両親は離婚していた。幸恵は父と姉と暮らしているが、母は県外で、旅館の女将を

していた。「うち、お母さんのとこに行って暮らすよ。お母さんもいいって言ってくれたし」幸恵の顔はすっきりしていた。
私たちはなぜか懐かしい昔話をして盛り上がった。

高校生活

いよいよ高校生活のスタートだ。
いじめに合わないか、ちゃんとやっていけるのかドキドキしながら登校した。
　私のクラスは４０人いたが男性は5名くらい、聞くと去年まで女子校だったらしいのでお友達がたくさんできそうでうれしかった。
　受験のとおり、授業はとても簡単だった。
あいかわらず私は小学生レベルの授業を受けている。
　一週間もたてば私にもお友達ができた。
恵美、麻衣、美紀、なかでも一番仲良くしてたのが照代だった。私たちはどこに行くのもいつも一緒だった。照代もあまり中学へは行ってなかったらしい。　私たちはよく学校をさぼって遊びに行った。　ある日朝から照代とご飯食べて話が盛り上がり、登校したのがお昼前だった。　二人でこっそり教室にむかっていると
「おい！」
誰かが呼んだのでふりむいたら、別のクラスの先生だった。
「おまえら今から登校か、ふざけるな！」
そういって先生は照代と私のカバンの中をチェックしだした
「この学校はプライベートっていうもんがねーのか？」
私がはらたって言うと
「だまれ！」
いきなり先生は私をなぐった。
先生だったら簡単になぐっていいのか？そう思いながらだまっていると今度は照代のカバンの中を見た。そして照代の財布の中までチェックされていた。そして小銭いれを見ているとコンドームが入っていた。当時、小銭いれの中にコンドームを入れるとお金が貯まるって言うジンクスがあったからだ。　先生は
「高校生のくせにふざけるな！」

と言って照代を殴った。コンドームだけで殴るなんて・・・。
私たちはむかつきながら教室に戻った。ちょうど休憩時間だったので、照代、恵美と机の奥からタバコをだし、非常階段でタバコをふかした
「あのクソオヤジ自分がご無沙汰だからって殴ることねーよな」
照代がぐちっていた。三人で文句ばかりいっていると照代の携帯が鳴りだした。
「ほぉ～い！」
照代はタバコを消してどこかへ行った。恵美と私はたわいもない話で盛り上がっていた、しばらくすると照代がハイテンションで戻ってきた。
「今日合コンあるんだけどどう？」
恵美は彼氏ができたばっかりだったので断った。
私は暇だし行くことにした。
　学校が終わり、照代と私は待ち合わせの駅に行った。むこうは三人できた。一人は中学の時同じクラスのやつで、もう一人はデブでキモイやつ。もう一人は照代オススメだが、私から見るとさえないやつで、私はテンションがさがった・・・。　とりあえず私たちはカラオケに行くことにした。
　カラオケについてとりあえず私は一番奥に座った。隣に照代、正面にキモイやつだった。
カラオケといっても私は人前で歌うのか好きではないので、黙ってタバコを吸う・・・。
みんなは盛り上がってカラオケを熱唱していた。すると、男のひとりが、「さっくんプロの腕前見せてやれよ！！」とキモイ男に言った。あいつあんな顔でさっくんていうのかよと私は思ったが黙って見ていた。　するとさっくんは1曲熱唱した。私はビックリした。
さっくんは歌がうまく、目をつぶるとライブにでもいるかのようで、鳥肌がたった。　「さすがさっくん」とみんなが聞き入っていた。
しばらくしてカラオケが終わり。みんな家に帰ることにした。三人

の男たちと別れると私たちも解散することにした。家に帰り、いつものように晩ご飯を作っていると照代から電話が鳴った。
「ほい！」　「今日楽しかったね！」と照代はテンションが高かった。「うん、そうだね！」あいそで答えると「実はね、さっくんがちほのこと気に入ったんだって！番号教えていい？？？」私はビックリしたが、あの歌を思い出して、気になっていたし、別になにかあるわけじゃないので「いいよ」と言った。　「ちほはさっくんのことどう思う？」照代がいきなり質問してきた。
　どうでもいいと言おうとしたが、「べつにいいんじゃない？」と答えた。「じゃあまた明日ね～♪」といって電話が切れた。
私はご飯の支度を済ませ、妹とご飯を食べた。家事も一段落して私は部屋に戻った・・・。
部屋でぼ～っとしていると電話が鳴った。見ると知らない番号だったが、さっきの照代のことを思いだして「はい」とでると「おれ！！わかる？さっくんです♪」やっぱりキモイと思いながら「わかるよ！今日はありがとう」と愛想で答えた。「ちほちゃんて彼氏いるの？おれマジ惚れた！」いきなりずうずうしかった。私は父のことがあっていらい男の人はみんな怖いと思っていたので、「ごめん、彼氏いないけど、私今彼氏ほしくないんだ・・・。」と答えた。「そっか、じゃまた遊ぼうよ！」そういって電話を切った。
　次の日「おはよ～」前から照代が走ってきた。「昨日さっくんから電話あった？さっくんかなり緊張してたよ」　「電話あったけど、めちゃ軽そうじゃんアイツ！」と私は無愛想に答えた。しばらくすると「さっくん軽そうに見えるけど、まだ彼女できたことないんだよ！さっくんぜんぜんもてなかったし～！またみんなで遊ぼうよ」照代は笑いながら言った。　たしかにさっくんはキモイし、もてるわけないよね、心のなかで、思った。それから私がバイトない日は毎日5人で遊んだ。
気づいたら私はさっくんのやさしさに惚れてしまった。でも怖い・・・。

ある日曜日、さっくんからメールが来た。「元気？今何してる？電話していい？」質問だらけでどれに返事していいかわからなくて「いいよ」　とだけ返した。するとすぐに電話が鳴った。
「やほ！」さっくんからだった。「ひまだったらちょっと遊ばない？」私はひまだったので「いいよ」と答えて待ち合わせの場所に行った。
「お待たせ～」さっくんが5分ほど遅れて来た。私たちはゲーセンに行ったり、洋服と見に行った。気づいたら夕方だった。私たちはお腹がすいたので、近くのマックへ行った。「俺んちこない？」いきなりビックリしたが、何かしてきそうになかったので、さっくんの家に行った。
さっくんちはボロい団地だった。「おじゃまします。」家に入ると誰も居なかった。しかも部屋は2つ私が不思議に思っていると「隣に親が住んでて、ここは俺と兄貴で住んでるんだ！」と私の考えてることがわかったのか、さっくんが答えた。
さっくんの部屋に行くと一本のギターがあった。「さっくんギター弾くの？」私が聞くと「聞きたい？」と聞いてきた。どっちでも良かったが「うん！」と答えた。さっくんがギターを手にして弾きだした。その音はまるでプロのようで、とても上手だった。私が目をつぶって聞いているといきなり音が止まった。さっくんを見るとなぜかうつむいて恥ずかしそうに顔を真っ赤にしていた。「どうしたの？」私が聞くと「ちほちゃん本当に彼氏作らないの？俺束縛しないし、浮気もしない、俺の彼女になってくれない？」私も気がつけばさっくんのことばかり考えていた。これって好きってことなのかな？そう思い「いいよ」といって、今日から彼氏、彼女になった。彼氏や彼女と言ってもなにをするのかよくわからないがとりあえず週末は一緒に遊んだ。花火大会へ行ったり、居酒屋に行ったり。とても楽しかった。　ある日の土曜日、家でテレビを見てたら電話が鳴った。見ると優子からだった。幸恵のこといらい会ってなかったが、複雑な気持ちで電話に出た。「ちほ～久しぶり！元気？高校は

どう？今何してる？」「別になにもしてないよ！ひまだし！」　「最近いいホストクラブ見つけたんだけど行かない？」私は一瞬さっくんの顔がよぎったが、家に居ても父が帰ってくるし「いこっ！」そういって優子と久しぶりに出かけた。　優子と私はお洒落をして夜の町にでる。私はとても新鮮だった。
しばらく歩くと「ここだよ！あんまりかっこいいやついないけど、マジ楽しいから」　そういって高級な扉を開けた。　「いらっしゃいませ」　この年でこんな待遇してくれることなんてないのでドキドキした。「失礼します！今日入った真治です♪よろしくね」軽いノリで隣に来た。真治はジャニーズ系の顔でかっこよかった。「名前は？」　「・・・ちほです。」緊張しているとみんなが集まってきて「カンパ～イ♪」楽しい時間が始まった。優子も楽しそうに飲んでいる。私たちはだんだん酔ってきて、カラオケしたり王様ゲームをしたりした。チョット飲み過ぎたかな？と思いトイレに行きたくなったので、席を立った。「バタッ！！！！！」足が動かなくて私は倒れた。「大丈夫？？？？」優子が慌てて私を起こした「ごめん！」そういってまた歩こうとしたが足が言うことをきかなかった。「真治くんつれてってあげなよ！」優子が言うと真治は私を抱えてトイレに入った。「ありがとうもう大丈夫だから・・・。」
　そういってドアを閉めようとしたら真治が中に入って来た。　「ちほが心配だからここに居るよ」
私は断って「大丈夫だから・・・。」そういって真治をよけたが「ドンッ」とすごい音で真治が私を壁に抑えた「ここじゃ誰も見てないからいいだろ？」　何を言ってるのか意味がわからなかった「トイレしたいから出て行ってよ！」私は少しムカついて言うと、いきなりキスをしてきた。
「やめてよ！」口は動くが体はいうことを聞いてくれなかった。
真治はニヤッと笑うと私のスカートの中に手を入れてきた、私は父を思い出し怖くなって真治の手を必死によけたが真治は興奮してきて、私のパンツの中に手を入れてきた。「止めて！！！！」

その時優子が来た。「ちほ大丈夫？」私はほっとした。「もう帰ろう？」私が言うと優子は私を抱えて店を出た。「今、ツレが迎えに来てるからもうちょっと待ってね！」優子はコーヒーを買ってきてくれた。５分くらいして優子のツレが来た。２０代後半くらいの男が二人・・・。車に乗ると、優子が「ちょっとだけドライブしない？」と言ってきた。久々に会って迷惑かけたしこのまま帰るのもかわいそうなので「いいよ」と言った。　　気づいたら私は眠っていた。しばらくして、誰かの話し声で目が覚めた「やっと目が覚めた！」優子が言う・・・。「ここ何処？」私は来たことのない家にいた。

「ちほが起きないから、このまま帰ると親父怒ると思って・・・。」優子が言う。

１２畳くらいの畳の部屋に一組の布団がしいてあった。私はそこへ寝ていた。「ごめんなさい」私が起きると「ここ俺たちの隠れ家だから気にしないで寝てて！」一人の男性が言った。

「良かったらお酒のむ？」もう一人の男が缶ビールを出した。三人は何かの映画を見ていた。

私は缶ビールを飲み、うつぶせになっていると一人の男が布団に入って来た。

私は人の家だし断れなくて、少しよけた。その人はやさしく声をかけてきて「一緒に飲もうよ」と言ってたくさんお酒を持って来た。また酔ってしまい、声が出なく睡魔と闘っていると、隣の男が私の背中をなでてきた。キモイこいつ・・・。　　そう思っていると「プチッ」と音がした。私のブラジャーがはずされたのだ・・・。抵抗したいのに体が動かない・・・。　男は私の胸を揉んできた。男の息がだんだん荒くなり、はげしく胸を揉んでくる。声を出したいのに出ない。優子助けて！　心の中で叫んでいたが気づくわけがない・・・。

すると今度は手がだんだん下に行き、私のスカートをめくりパンツの中に手が入った。「止めて！」私は必死に動いた。男は私の体が

動かないのに気づいてるようで、私を押さえつけ、パンツの中にある手を動かしだした。私はただ我慢するしかなかった・・・。

戻らない時間

私は頭が痛くて目が覚めた。
起きると見たことのない部屋にいた…　ビックリして横を見ると隣にしらない男が寝ていた…　裸だった。
そしてふと自分を見ると私も裸で下着もつけてなかった…。
飲みすぎたのか昨日のことが思い出せない…。
　私は怖くなって急いで服を着た。
　なぜか子宮がズキズキして痛くてそぉっと部屋を出た。トイレに行こうと思うのに知らない家でどこに行けばいいかわからない。
私は目をこすってあたりを見回した…　なんか不気味な家だった。
　窓からは光が入らないし、たなの上に飾られているものもすべてホコリまみれ…　人が住んでるようには見えない…とりあえず目の前にある階段を降りた。　階段を降りると、目の前にホコリにまみれた日本人形が座って置いてあった…　私はビックリして一瞬固まったが、
「なんだ、人形じゃん！」
自分にいい聞かせるように人形をよけて歩いた。
目の前にWCと書いてある部屋があった。やっとみつけたが、やっぱり誰も住んでいないのか、トイレの電球が切れていた・・・。
私は手探りで便器に座り、急いでトイレを済ませた。
このまま逃げようか・・・。そう考えていたがよく考えると、優子はまだあの部屋で寝ている・・・
私はまた2階の部屋に戻った・・・。
ゆっくり優子の隣に行き、「優子！起きて！！！」小声で優子の背中をゆすった・・・
優子はゆっくり目を覚ました。「帰ろ！！！早く！」私があわてて話すと、優子はにやっと笑って「ちほ服着たんだね　どうだった？？」といった。

「昨日何があったか覚えてないんだ・・・　」私がうつむいていうと「とりあえず帰ろっか・・・。」
そういって優子は起き上がり、優子の近くで寝ている男に「うちら帰るから！」そういって優子と私は部屋を出た。
優子はいつものように近くにあった自転車を盗み、またがった。「早く乗って！！」
私は後ろに座り、優子に話かけた。「あの家誰の家？なんか不気味だった・・・。」優子は笑いながら「あの家空家だって！あいつらが発見して、たまに泊まってるらしいよ～！」
優子は楽しそうだった。　「ちほって昨日のこと本当に覚えてないん？」優子が突然聞いてきた
「優子何か知ってる？昨日のこと教えてよ」私が言うと、優子は話だした。
「昨日ちほは、ちほの隣に居た男とエッチしてたよ！昨日あの男がちほに飲ませたお酒、睡眠薬入れたんだって。ちほってまだ処女だよね？痛くなかった？」
優子ののんきな言い方に腹が立った、「何でとめてくれなかったん？」
「だって、何回か言ったけど、やっぱ男が強いし、怖かったんよ、マジごめん・・・。」
優子がうつむいた、優子は悪くないし、逆らえない気持ちもわかるし、私は一人落ち込んだ・・・。
昨日のことを聞いて恥ずかしくなった。

「ちほに辛い思いさせてごめん、あんなことになるなんて・・・。うち先輩に相談して、あいつらに痛い思いさせてやる！」優子は腹が立ったみたいで、とても怒っていた、私のこと心配してくれた。
私はどうすればいいか、考えることができなくて、優子に任せることにした。優子を信じて・・・。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2768a/

どうして生まれてきたの？

2010年10月17日06時49分発行